キャリア選択自己効力感の変化からの妥当性の検討

—混合モデルによる決定不安の類型との関連から—
○花井洋子¹・清水和秋²

(¹関西大学大学院社会学研究科・²関西大学社会学部)
決定不安, 混合モデル, 自己効力感

Validity testing through change in career choice self-efficacy
Yoko HANAI¹, Kazuaki SHIMIZU²

(¹Graduate School of Sociology, Kansai Univ., ² Faculty of Sociology, Kansai Univ.)
anxiety of making choice, mixture modeling, self-efficacy

【目的】 キャリア選択が困難な状態である不決断と関連のある心理的要因のひとつに不安がある (清水,1983)。特性不安が関連していることを報告したものには、Fuqua et al.(1987), Santos(2001), 清水・花井 (2008) などがあり、安達 (2006) も、6 領域の仕事活動のうちの 4 領域で、特性不安の低い方が、高い自己効力得点を示すという結果を報告している。

藤井 (1999) は、進路不決断を予知する要因の一つとして就職不安を取り上げ、就職活動に対する不安とストレス及びうつ水準との間に強い関連があることから、就職活動に対する過度の不安は、精神的健康上、望ましいといえないと報告している。古市・久尾 (2007) は、進路決定自己効力感と就業に対する不安を職業忌避への影響要因としたモデルを大学 1,2 年生で検討し、女子で、就業不安が高いと職業忌避を高める影響を、また、自己評価と困難解決が就業不安に、計画立案が職業忌避に負の影響を与えることが男女ともに共通してみられことを報告している。そして、不安や忌避傾向への自己効力感の影響を議論している。松田・永作・新井 (2009) は、就職活動に対する不安が高まると、就職活動の量や満足感が低まるという直接的影響に加え、不安に対する対処行動に注目し、不安が高まると、問題焦点型という積極的コーピングが低まり、間接的に活動量や満足感が低まるという結果を報告している。

これらの就業不安やキャリア選択過程での不安としては、準備不足なのではないかという不安、サポートしてもらえないかという不安、キャリアを決定することへの不安、試験などの障害に対する不安などがあげられている。これらの不安は、特性不安のように比較的安定したものではなく、キャリア選択の活動に伴い、また、キャリア発達過程の中で個人内で上昇や下降の変化をしていると思われる。従って、時間経過の中で、不安の変化と、自己効力感の変化や不決断の変化との関連をみることは、尺度の妥当性のより詳しい検討となると考えられる。そこで、本研究では、決定不安を取り上げ、自己効力感尺度との関連と逃避やモラトリウムとの関連を時間的な変化からみることとする。

【方法】 2007 年と 2008 年の 8 月に工業高校で 2 回の縦断調査を実施した。両方に回答した 2007 年調査時の 1 年生 170 名 (うち女子 1 名)、平均年齢 15.39 (SD.512) と 2 年生 137 名 (全員男子)、平均年齢 16.39 (SD.505) の計 307 名を対象とした。質問紙には、キャリア選択自己効力感 (花井, 2008) とキャリア意思決定 (清水・花井, 2007) の 2 尺度を用いた。分析には Amos17.0, R2.9.2, Mplus5.21 を用いた。

【分析と結果】 潜在クラスからの検討: 1 年間の時間経過をおいた 2 回の縦断データから、決定不安について、潜在変数でのクラスを混合モデルで探索的に探し、適合度から 3 つのクラスに分けることが適当と判断できた。それらは、決定不安の変化から「上昇群」、「変化なし群」、「下降群」の 3 群と解釈した。これらの 3 群が自己効力感の変化とどのように関連

しているかをみるために、因子得点により自己効力感の下位尺度との反復のある 1 要因分散分析を行った。そして、意思決定尺度の逃避とモラトリウムとの関係を分析した (表 1)。

表1 決定不安のクラスと自己効力感、逃避、モラトリウムとの分散分析結果									
自己効力感 尺度	決定不安 クラス	T1		T2		F値			
		因子得点	SD	因子得点	SD				
自己評価	1上昇	2.44	0.68	2.49	0.68	5.85	**	3>1,2	
	2変化なし	2.56	0.60	2.62	0.59	10.19	**		
	3下降	2.67	0.55	2.93	0.58	3.33	*		
	計	2.57	0.61	2.66	0.62				
目標選択	1上昇	1.99	0.51	2.06	0.55	6.68	**	3>1,2	
	2変化なし	1.96	0.43	2.11	0.50	42.72	***		
	3下降	2.11	0.48	2.42	0.55	5.95	**		
	計	2.00	0.46	2.17	0.53				
計画立案	1上昇	1.95	0.60	1.97	0.67	6.76	**	3>1,2	
	2変化なし	2.03	0.52	2.15	0.56	24.61	***		
	3下降	2.11	0.50	2.48	0.59	7.69	**		
	計	2.03	0.53	2.19	0.60				
情報収集	1上昇	2.34	0.66	2.50	0.69	2.53	↓		
	2変化なし	2.43	0.58	2.66	0.62	49.42	***		
	3下降	2.47	0.58	2.84	0.64	2.35	↓		
	計	2.43	0.59	2.67	0.64				
意思決定の 主体性度	1上昇	2.30	0.53	2.47	0.49	7.08	**	3>1,2	
	2変化なし	2.42	0.59	2.50	0.55	21.80	***		
	3下降	2.62	0.59	2.80	0.59	1.81			
	計	2.44	0.59	2.56	0.56				
逃避	1上昇	2.12	0.69	2.15	0.64	13.81	***	3<1,2	
	2変化なし	2.13	0.65	2.01	0.58	18.71	***		
	3下降	1.86	0.71	1.48	0.51	8.87	***		
	計	2.07	0.67	1.92	0.62				
モラトリウム	1上昇	2.03	0.68	2.28	0.87	6.47	**	3<1,2	
	2変化なし	2.22	0.79	2.20	0.85	0.46			
	3下降	1.99	0.70	1.67	0.74	11.80	***		
	計	2.14	0.76	2.11	0.86				

結果: 自己評価・目標選択・計画立案で決定不安のクラスと 2 回の測定機会 (T1, T2) との交互作用がみられた。不安の上昇群と変化なし群では変化は大きくなかったが、下降群では、最も自己効力感が高く、T1 から T2 にかけて大きく上昇した。また、決定不安と逃避・モラトリウムとの関連では、交互作用がみられ、決定不安の下降群で逃避とモラトリウムの因子得点は最も低く、T1 から T2 にかけて大きく下がった。すなわち、自己評価・目標選択・計画立案が高まると、決定不安が低まり、逃避・モラトリウムも低まるといえる。すなわち、古市・久尾 (2007) の自己効力感、就職不安、職業忌避との関連の構造をおおむね支持する結果を得ることができた。

決定不安の変化を学年でみると、1 年生では、1 年後に上昇し、2 年生では下降した。1 年生では決定不安が上昇する生徒が多く、2 年生では低まる生徒が多いという偏りがみられたことから学年の特徴を示唆している。これは、進路選択への取り組み方と関連があると考えられ、1 年生から 2 年生にかけては、まだ進路の選択に取り組んでおらず不安が高まるが、2 年生から 3 年生にかけて実際に取り組み始めると不安が低まるとみられる。

【考察】 本研究では、時間経過での変化をとりいれたことにより、決定不安の低下と、自己効力感の高まり、逃避とモラトリウムの低下は互いに関連していることを報告することができた。教育的介入プログラムのためには、全体から学年、さらに個人へと変化をより詳細に検討していく必要がある。